

わたしの京都

河野裕子

下宿生活―東山区蹴上

下宿している学生に会うと、つい「えらいねえ」と言ってしまう、あっ、しまったと思ったことが何度かある。思ったことを後先なしに言ってしまう思慮の無さがこんなところにもあらわれてしまう。下宿暮らしといえば、当然ひとり暮らしである。焼きたてのサンマにレモンをじゅつと絞ったのや、旬の小松菜がどんなに軟らかく炊けても、「おいしいね」と言って一緒に食べる人の無い生活ほど侘しいものはない。下宿生たちの多くは、昼はともかく、朝と夜の食事はひとりでとっているのだらう。その中で規則正しく野菜たっぷり御飯を食べている人がどれだけいるだろう。高校三年生のとき、一度だけ下宿生活をしたことがある。それは下宿経験ともいえない

ものだった。ひと月も経たないうちに音上げて実家に逃げ帰ってしまったからである。高校三年生といっても二度目の三年生であり、わたしはクラスのみならず年が上だった。前にも一度書いたことがあるが、わたしは初めの三年を一年休学してしまっていた。毎朝五時半起きの無理な遠距離通学がたたって、心身ともにおかしくなってしまったのである。心配した母は復学したわたしを下宿させることにした。わたしと同じ目にあうことを案じて、三歳下の妹まで一緒に下宿させたのは良かったことかどうか、今でもわからない。東山の蹴上、都ホテル（最近、名前が変わったらしいが）の前に同じような造りの二階建ての京都風の民家が三、四軒ある。わたし

と妹が下宿したのはその中の一軒の家である。わたしたちは二階の一部屋に暮らすことになったが、学校生活はもとより、こまごまとした暮らし全般のことが何もかも心もとない。夕方、ふたりで連れ立って市場に買いだしに行く。ほんの少しの食料や日用品を買うのだが、何をどう買ったものか途方にくれたものである。家主さんの台所を使わせてもらったが、なるべく音をたてないように、水をたくさん使わないように気を使って料理したものが、旨かろうはずがない。音をたてないように一番気を使ったのが夜のトイレである。学校で履いている上履きで歩いていて叱られたことがあった。それから素足で歩くことにしたが、今思えばそれも

家主には気にいらなかったことかもしれない。

市電で通学していた。高校の最寄りの駅は東山七条。ここから下宿先の東山三条まで十五分くらいかかっただろうか。電車を降りて東山に向かって二十分ほど歩く。途中に白川という川が流れていて、その近くに「初音書房」という出版社があり、行き帰りに何となく気になっていたが、「初音書房」が当時、西日本では唯一の歌集専門の出版社だったということは知る由もなかった。

一年間の休学は予想外にこたえた。数学と英語にまず躓いた。友達がいらない教室にわたしはお客さんのように座っているばかりで、時間を過ごすのが苦痛であった。受験を控えて焦っていたが、不安のあまり勉強に手がつかなかった。何より嫌だったのは、学生食堂

で前のクラスに居た友だちに出くわすことだ

った。わたしより成績の良くなかった友だちが女子大の制服を着ているのを見るのが辛かった。そんなわけで学校も下宿も楽しくなかったけれども、ひとつだけ忘れられないのは、下宿の隣にあった蹴上の浄水場に咲いていた桜の花である。ゆうぐれ、行くところがなくて、その辺をふらふら歩くことがよくあったが、浄水場の低い煉瓦の塀ごしに枝を差しだして咲いていた桜の花は、その後いくども見た桜の中でも最もころろに沁みるもののひとつであった。満開であったにもかかわらず、その桜の枝には程よいくらいに花がついていて、夕光のなかに一輪一輪の花が、一枚一枚の花びらが透けて見えるほどに鮮やかだった。桜の花をあんなに透明に悲しい気持で見たと

とはない。

妹をひとりほったらかしにして実家に帰るとき、家族がどのような対応をしたか、それも忘れてしまった。とにかく妹だけは残り、やがて学校の寮に入ることになった。女子校の寮というところがこれがまた文字通り女子校の寮で、夜寝るときは、夏どんなに暑くても雨戸まできっちりしめる。底冷えの京都の冬は有名だが、どんなに寒くても部屋には火鉢ひとつだという話を妹から聞いて閉口したものである。我慢強い妹だから寮暮らしができたのであって、わたしなら疾うにまた逃げ出していたらう。

大学に入ってから何人かの友だちの下宿に行ったり泊まったりしたことがあるが、下宿生活にそんなに困っているふうには見えなかった。なかには襖一枚隔てて暮らしている人や、一部屋を共有している人もあった。そういう部屋を根城にして友だちを作り、勉強をし、就職していく人たちを、誤解される言い方かもしれないが、やっぱりわたしはえらいと思う。時々、都ホテルの前を通ることがあるが、どうしてもあの家を見てしまう。不思議なことにその家は、昔から古びていたように今も古びて静かに建っている。

(かわの・ゆうこ「塔」選者)